

ボランティアにおけるタブー・トレードオフ 自尊心に打ち勝てる金額はいかほどか？

タブー・トレードオフとは聞きなれない言葉である。心理学の用語とある。GoogleChromeでこの言葉を検索しても4件、"taboo trade-off" で検索しても72件のみのヒットである。

タブー・トレードオフとはいかなる概念であるか。記事では「愛国心や友情のような『聖なる価値』をトレードオフの対象とみなすこと（すなわちお金で代替可能なものとみなすこと）に、激しい拒絶反応が起きる現象を指す」と説明されている。核廃棄物の最終処分場決定時に実際に起こったタブー・トレードオフの実例についてはなるほどな、と思う。

最近の日本は毎年のように自然災害に見舞われ、多くのボランティアがその復興のために手弁当で手助けしている。誰から指示されたわけでもなく、困っている人を私が助けなければとの気持ちから出た行動である。

このボランティアに対して、日当を少ないながらも2000円お支払いしますと言えば、タブー・トレードオフから自尊心が多いに傷付けられるものと考えられる。それならば、5000円ではどうか？ 1万円ではどうか？ 3万円ならばどうか？ この金額は人それぞれに異なるが、どこかでタブー・トレードオフを超える金額があると考えるのが社会一般だ。ある人は1万円で、またある人は3万円なら、そして100万円という金額を聞いてもお金を出さずというならボランティアなどしないという人もいることだろう。

日本経済新聞 2020.2.1

天機小機

原子力発電所の核廃棄物は最終的に、ガラス固化体加工して地下深くに埋める「地層処分」を行うことになっている。しかし、最終処分場の場所は、世界中のほとんどの国で決まっていない。この問題をテーマとするシンポジウムで、英国での失敗のエピソードを聞いた。

英国のある自治体では、地層処分場の建設に住民の過半数が同意するところまで話が進んだ。しかし、その段階で政府が地元補助金を出すと言い出し金額交渉をしようとしたところ、住民が猛反発して処分場建設は破算になってしまったという。住民は「国全体のために自分たちは犠牲になる」という公共心で処分場を受け入れようと言った。

タブー・トレードオフと地層処分

の決断をしたのに、札束で頬をたたかれたと感じ、一気に反対に傾いたのである。

これは心理学で「タブー・トレードオフ」として知られる現象の典型例といえる。愛国心や友情のような「聖なる価値」をトレードオフの対象とみなすこと（すなわちお金で代替可能なものとみなすこと）に、激しい拒絶反応が起きる現象を指す。政府が補助金を出したことで、住民たちは自らの崇高な愛国心がお金に換算できる卑劣な財物のように扱われたと激怒したのである。

日本でも、地層処分場が決まらないうちの大きな要因として、タブー・トレードオフの問題があると指摘される。補助金の額をいくつり上げても、お金のための処分場を誘致しようという気にはならないといっている。

しかし、金銭的な補償をまったく無しにすればそれでいいかという点、そうではない。処分場の受け入れ自治体の住民の崇高な愛国心に対しては、全国の国民から深甚な「謝意」を伝えることが必要であり、謝意は金銭的な形で表すのが相応だからだ。処分場受け入れの「対価」ではなく、国民総意の「感謝のしるし」として金銭的支払いをする仕組みが必要だ。候補地を選定するよりもまず、この段階で、謝意としての金銭支払いの仕組みを先に決めておくべきなのである。

シンポジウムでも経済学者からこのような意見が出たが、地層処分のような難しい問題については、心理学や経済学のあらゆる知恵を総動員して新しい仕組みづくりが必要とされているのではないだろうか。（風都）

善意の行動に対しては心で報いる。心と心のつながりである。ここに貨幣経済が入り込むと、次元が異なる心と金銭の関係となる。ボランティアへのお礼はボランティアで返す。阪神淡路大震災から25年、よく聞かれた言葉である。